

第3回 4大学間「学生交流自主的・実践的研究プロジェクト」
研究成果発表会

1 中四国学生政策立案コンテスト



発表者 : 有光 紀子・明石 美和子さん
岡田 真理子・浦志 知香子さん
櫻村 彩加さん

発表内容

題目 : 中四国学生政策立案コンテスト

研究者 : 高知大学 人文学部 社会経済学科

有光 紀子・明石 美和子・宇田 智之
浦志 知香子・岡田 真理子・小松 悠
櫻村 彩加・角田 美紗季・岩田 典子
種田陽平

<はじめに>

『Hot ShiChu Project 2004』を企画したのは、東京で行われた『学生のための政策立案コンテスト GEIL2003』が終わり、3ヶ月経った頃でした。他大学間交流の重要性を実感した私たちは、『主体的に行動に移すことができる学生の創出』をコンセプトにコンテストを開催しました。学生同士が出会い、様々な価値観と触れ合い、自らのフィールドに帰って活躍する—そういったきっかけを提供できたのではないかと考えています。とはいえ、参加者・スタッフにとってもこれはまだまだ“はじめの一步”。今後も、地方大学の学生活動が活性化することをスタッフ一同願っております。

この実施報告書では、『Hot ShiChu Project 2004』の具体的内容、コンテスト当日の様子や参加者に行ったアンケート分析結果などをまとめております。この報告書を読んで、『Hot ShiChu Project 2004』についてより理解して頂ければ幸いです。

<目次>

1. 企画概要	2
2. 企画趣意	3
3. 企画成果	
1日目	4
2日目	5
3日目	6
4日目	7
4. 財務報告	8
5. 協賛・支援一覧	9
6. 参加者分析	12
7. アンケート分析結果	14
8. スタッフ紹介	23
9. 最後に	37

1.企画概要

《コンセプト》

主体的に「行動に移す」ことのできる学生の創出

《日程》

2004年9月15日～18日の3泊4日間

《場所》

高知県立高知青少年の家・青少年宿泊施設伊野スポーツセンター
高知大学人文学部棟・共通教育棟

《参加資格》

中四国を中心とした大学に在籍する学生

《定員》

50名

《主催》

『Hot ShiChu Project 2004』 実行委員会（所属：高知大学人文学部社会経済学科）

《代表者》

有光 紀子（高知大学 人文学部 社会経済学科 3年）

《コンテスト概要》

『Hot ShiChu Project 2004』（中四国学生政策立案コンテスト）は、中四国を中心とした大学に在籍する50人の学生が集まり、3泊4日の合宿形式で行われます。参加者は、4～5人1組のチームに分かれ、与えられた地域問題に対する解決策を作り上げていきます。3泊4日間の中には、実際の現場へ足を運び生の声を集めるフィールドワークや、各チームが練り上げたプランに対して社会人の方々からアドバイスを頂くコンサルティングなど普段の生活では体験できない刺激がたくさん盛り込まれており、そういった体験を踏まえて、最終日には、各チームが4日間かけて作り上げた独自の政策案をプレゼンテーションし、優勝を競い合います。



2. 企画趣意

『Hot ShiChu Project 2004』を実施するにあたって、コンセプト、現状分析、目標、方法、理想、活動理念を以下のように設定しました。

『Hot ShiChu Project 2004』のコンセプトは、『主体的に行動に移すことができる学生の創出』です。現状として、東京・京都以外の大学は大学間の距離が離れているため学生同士の交流が少なく、意見交流など刺激しあうこともままならない状態であり、また、若者の多くは社会の諸問題について真剣に考えたり、正確に理解していない傾向が強いということが挙げられます。

この現状を打破するために、目標として『社会と接点を持つことができる学生の創出』『他大学間交流の推進』『学生同士のネットワークの形成』『地域活性の一助となる』を掲げ、『Hot ShiChu Project 2004』を企画しました。

上記の目標を達成するための方法として、『Hot ShiChu Project 2004』の持つ特徴は、『地方の抱える身近な社会的問題に向き合うことから、社会に目を向けた学生生活を送ろうとするきっかけを与える』、そして、『他大学間交流の意義の認識』という点です。上記で掲げた目標をこのイベントに参加する学生により明確に意識してもらうために、『コンテスト形式』『フィールドワーク』『社会人によるアドバイスタイム』『チーム制による合宿形式』というコンテンツを組み入れました。

『Hot ShiChu Project 2004』に参加した学生たちが、自らのフィールドに帰って、地方の学生活動を活発化させる有力な主体となることを最終的な理想とし、『地方の学生に対して多方面で問題意識を持つきっかけを与え、高知を拠点に人の輪、地域の輪を広げる』を活動理念としました。

《具体的プログラム内容》

3泊4日の合宿形式

普段の生活では味わうことのできない空間を創り出し、政策に没頭する。

コンテスト形式

社会の諸問題の中から与えられた課題についての具体的な解決策を探る。最終日には、優勝を競いプレゼンテーションを行う。

初対面1チーム5人制

初めて会う学生と1つのモノを作り上げる。チームで動く4日間は、コンセンサスと協調性が試される。

Hot ShiChu Project

社会人による審査

自分たちが作り上げたプランに、社会人から評価が下る。社会人から厳しい評価を受けることで、より良いプラン完成に近づいていく。

プレゼンテーションセミナー

良いプランを発信するツール…人に伝わるための技術を学ぶ。

フィールドワーク

理想を語るには、現場を見なければ始まらない。現場を見て、問題発見能力を身につける。

3. 企画成果～1日目～

9月15日、照りつけるような日差し。12時30分に受付を始めると、続々と参加者が集まって来ました。皆心なしか、顔に緊張の色が見られました。これから始まる4日間への期待と不安の表れでしょうか。チームも課題も発表されないまま、高知大学から高知県立高知青少年の家・青少年宿泊施設伊野スポーツセンターへ向かうバスに揺られました。開会式を終え、とうとうチームの発表の瞬間です。これから4日間を共にするチームメイトは誰なのか。ドキドキを隠せません。Aチームから順番に名前を読みあげていくと、あちこちから少し高ぶった声が聞こえました。

その後は、チームメイトを知り、仲を深めるために実行委員で用意したゲームを行いました。徐々に緊張の糸がとけ、参加者に笑顔が増えていきました。

休憩をはさみ、雰囲気を変えて課題発表の時間です。『地域に根ざした総合学習を提案せよ』プロローグとして、パワーポイントで詳しい設定を説明しました。そこには、既に真剣な表情の参加者の顔がありました。

続いて、政策立案講座。政策立案の経験者もいれば、全く初めてという人もいます。そのような人も含めて、政策立案とは何かをわかってもらう時間という位置付けとなっています。パワーポイントを用い、身近な事例を取り上げながら、「こんなことも政策立案なんです」と説明しました。質問の時間を設けると、鋭い質問が飛び交い、その厳しい表情から、参加者の意気込みが感じられました。

1日目も終わりに近づき、アドバイスタイムが始まりました。実行委員が各チームの進行状態を聞いたり、アドバイスする時間として設けられています。1日目ということで、どのチームもまた走り始めたばかりで、プランの中身というよりは、入り口付近での議論が繰り返されていました。1日目だということに、参加者は皆元気で、アドバイスタイムは深夜まで続きました。



～課題発表にて～



～アドバイスタイムにて～

～2日目～

2日目は主にフィールドワークを行いました。今回の課題である『地域に根ざした総合的な学習』に関わっている現場に実際出向くことにより、机上の空論ではないリアリティのある情報を収集することができ、フィールドワーク終了後、各々が得た情報をチーム内で共有し最終日に向け、政策案をブラッシュアップしていきました。やはり、フィールドワーク前後では多くの参加者の課題に対する捉え方が変化したり、考え方がより深まるなどクオリティの高い議論、プランニングに繋がるに至りました。以下が実際に出向いたフィールドワーク先です。

[高知市立一宮東小学校、(株)若竹まちづくり研究所、高知県教育委員会情報教育推進課]

唯一、総合的な学習を受ける側の子ども達の意見を聞くことができた高知市立一宮東小学校では参加者が直接子ども達にインタビューを行う時間が設けられました。そこでは、自分達が想像していた答えとは全く違った答えが返ってくるなど、実際の現場を体感することにより子どもありきの授業（総合的な学習の時間）であることを再認識し、行政が立案する政策とは一味違った学生の立場としての、地に足がついた政策のヒントを多く得られた貴重な時間となりました。

若竹まちづくり研究所においては、国土開発・利用、国民生活、福祉・医療・教育など長年に渡って蓄積された研究内容を基にまちづくりの観点からの情報を得ました。

そして情報教育推進課では、土佐の教育改革の柱のひとつである生徒の基礎学力の定着・学力の向上、情報活用能力の育成を目指した、授業におけるコンピュータやインターネットの導入内容についての詳細を聞き、授業を提供する側の観点からの情報収集を行いました。このようにさまざまな観点から情報を得ることにより、総合的な学習の時間の作成にあたり、偏りのない広い視野を持った上での取り組みに繋がりました。

この日は更にチーム内のメンバーはもちろん、他のチーム、そしてスタッフとの交流を深めるため懇親会が行われました。懇親会での簡単なゲームを行っていく中で、各々が良い意味で打ち解け合い、プランニングに際して最も重要な態勢と言える本音での活発な議論へと繋がる大変意義あるものとなりました。



フィールドワーク
～一宮東小学校にて～

～3日目～

各チームが2日間かけて練り上げたプランに磨きをかけ、より良いプランへと発展させていくためのコンサルティングタイムが3日目のメインイベントです。

限られた時間でどのようなアドバイスを受けるのか、受けたいのか、そのためにはどうやって自分達のプランを伝えれば良いのか、など様々な準備を整え、コンサルティングタイムに臨んでいる参加者の姿が見られました。

内田洋子氏、畠中洋行氏、松岡宣明氏、宮田龍氏、(50音順)以上4氏にご協力頂きました。全てのチームが4氏にアドバイスを頂けるとするのがベストではありましたが、時間の関係でアドバイスを受けられるのは2氏からのみとなりました。1チームあたり15分×2回という非常に短いコンサルティングタイムではあったものの、参加者は自分達のプランを熱心に伝え、自分達のプランに大きくプラスとなるアドバイスを受けられました。ただし、参加者からは「もっと時間が欲しい」「全ての社会人から意見を聞きたかった」という声も上がっており、次回以降へ生かしていくべき反省点だと言えるでしょう。

コンサルティングタイム後、昼食を挟んで、引き続き高知大学にてチームごとの作戦会議に移りました。コンサルティングタイムでもらったアドバイスをもとにプランのブラッシュアップを図りました。

また、プレゼンテーション講座では講師の篠田大輔氏のワークショップを通して、柔軟な思考とプレゼンテーションにおいて大切なことは何かということを考えることができ、またプレゼンテーションを行う機会が持てました。



社会人による審査

～コンサルティングタイムにて～



『プレゼンとは??』

～プレゼンテーション講座にて～

～4日目～

これまでの3日間、各チームがフィールドワークや社会人とのコンサルティングを重ね、議論をし、自分たちのプランを作ってきました。

決勝プレゼンテーションに出場することができるのは4チーム。参加8チームはまず予選プレゼンテーションを行わなければなりません。予選プレゼンテーションでは自分たちのプランを伝えきることができたチーム、途中で制限時間がきてしまい伝えきることができなかったチームと様々でした。

決勝プレゼンテーションに出場することができたのは、『石っころ大作戦』のAチーム、『過疎地域における世代間コミュニティの形成を目指す』のDチーム、『帯屋町楽集カードプロジェクト』のEチーム、『うちのコレ、すごいんです!!』のFチームの4チームでした。また、審査委員に内田洋子様(NPO 高知市民会議)、清岡光二様(清岡サンゴ店)、坂本耕平様(高知県森と緑の会)、澤村理恵様(土佐市立高石小学校)、篠田大輔様(株式会社ジャノメクレディア)、前田正也様(高知中央高等学校)を迎え行われました。

決勝プレゼンテーションでは、4チームそれぞれが予選プレゼンテーションの時とは違い、自信を持ってプレゼンテーションを行いました。各チームともプレゼンテーションに工夫が見られ、3日目の夜に行ったプレゼンテーション講座の効果を感じることができました。

優勝は、『石っころ大作戦』のAチームでした。今年10月に伊野町、本川村、吾北村の3町村が合併し、新しくできる『いの町』をフィールドとし、石を題材としたプランが審査委員の皆様にも認められました。合併というリアルタイムな問題を取り上げたということ、石という身近で誰もが手に触れたことがあるものを取り扱ったということなどが高く評価され、優勝に至ったのです。

優勝はAチームでしたが、決勝プレゼンテーションに出場か否かを問わず各チームのプランは素晴らしいもので、どのチームが優勝してもおかしくないものであったことは間違いありません。参加者全員に疲労の色は見えましたが、それと同時に4日前とは違う一回り大きくなった姿を目にすることができました。



質疑を受ける学生達

～決勝プレゼンにて～

4. 財務報告

『Hot ShiChu Project 2004』の財務報告についてご報告申し上げます。内訳につきましては、下記収支決算明細を参照にいただければと思います。なお、表のみでは、分かりにくい点が若干ございますので少し説明を加えさせていただきます。

第一に、学長裁量経費は、平成16年度4大学間（高知大学・愛媛大学・島根大学・山口大学）学生交流自主的・実践的研究プロジェクト採択によるものです。

第二に、参加者負担金についてですが、当コンテストは当初50名の参加者を募集していましたが、最終参加予定者が33名という結果となりました。また、3泊4日間のうち、公用を理由に2泊3日間しか参加できないという参加者が1名おり、参加者負担金は、 $10,000 \times 32 + 7,500 = 327,500$ 円（ $10,000$ 円 $\times 32$ 名 $= 320,000$ 円、2泊3日間参加費7500円）となっております。

第三に、スタッフ参加負担金は、『Hot ShiChu Project 2004』運営スタッフ8名の宿泊費・飲食費に当てられました。よって $10,000 \times 8 = 80,000$ となっております。

第四に、奉加帳による募金についてですが、『Hot ShiChu Project 2004』にご理解頂いた社会人、大学関係者の方々に奉加帳による募金という形でご協力いただきました。また、協賛金については、少しではありますが、地元の企業、特定非営利法人を中心に協賛していただきました。『Hot ShiChu Project 2004』を成功に導くことができたのも当コンテストにご理解いただきました協賛企業、社会人、大学関係者の方々のお陰でございます。この場を借りて今一度厚くお礼申し上げます。来年度以降も、我々の活動に対して、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

収入		支出	
協賛金	50000	宿泊費	297045
学長裁量経費	140000	飲食費	235467
参加者負担金	327500	印刷・製本費	159000
スタッフ参加負担金	80000	消耗品費	15000
奉加帳による募金	154650	雑費	20658
プレイベント時繰越金	20	交流会・懇親会費	50000
人文学部後援会費	50000	通信費	25000
計	802170	計	802170

5. 協賛・支援一覧

《協賛》

特定非営利活動法人 FUSE

田中 健一 株式会社 ASA 設計 代表

竹村 昭彦 牡丹酒造株式会社 社長

《後援》

経済産業省 四国経済産業局

高知新聞社

《掲載メディア》

高知新聞

《コンテスト協力》

【フィールドワーク先】

(株)若竹まちづくり研究所 (担当: 取締役 渡辺 克志)

高知県教育委員会 情報教育推進課 (担当: 溝渕 雅一)

高知市立一宮東小学校 (担当 校長 山本 勝子)

【コンサルタント】

内田 洋子 特定非営利活動法人 NPO 高知市民会議 事務局長 専務理事

畠中 洋行 (株)若竹まちづくり研究所

松岡 宣明 松岡税理士事務所 所長

宮田 龍 高知市立朝倉第二小学校 教頭

【プレゼンテーションセミナー講師】

篠田 大輔 株式会社ジャノメクレディア (高知大学人文学部社会経済学科 OB)

【最終プレゼンテーション審査員】

内田 洋子 特定非営利活動法人 NPO 高知市民会議 事務局長 専務理事

清岡 光二 株式会社 清岡珊瑚店 代表取締役

澤村 理恵 土佐市立高石小学校 教頭

坂本 耕平 社団法人 高知県森と緑の会 事務局長

篠田 大輔 株式会社 ジャノメクレディア (高知大学人文学部社会経済学科 OB)

前田 正也 高知中央高等学校 校長

《プロジェクト協力》

株式会社 相愛

川竹 大輔 高知県特別職知事秘書

特定非営利活動法人 SOHO ベンチャー協会

西岡 謙一 西岡燃料(株) 代表取締役専務

濱田 憲司 高知県商工労働部将校振興課 主幹

平島 輝之 高知商工会議所 中小企業相談所

森岡 眞秋 高知市産業振興総務課

山本 勝子 高知市立一宮小学校 校長

ヤングベンチャー2004 龍馬発掘大作戦ビジネスプランコンテスト 学生スタッフ

依光 晃一郎 特定非営利活動法人 FUSE 代表

渡部 修治 経済産業省 四国経済産業局 地域経済部 産学官連携推進室 調査官

《奉加帳による募金協力》

【高知大学 人文学部】

飯国 芳明

石筒 覚

伊丹 清

円谷 友英

大石 達良

岡本 和明

岡本 智英子

佐々木 正人

頭川 博

中川 香代

中澤 純治

根小田 渡

平岡 和久

保坂 哲郎

松永 健二

松本 充郎

村端 五郎

【高知大学 就職情報室】

河田 陽子

佐田 澄雄

中沢 秀夫

松本 繁代

【高知大学 学生サービスセンター】

尾崎 陽子

町田 啓介

水沼 浩司

山本 正彦

【高知県立高知工業高等学校】

濱口 利枝

【高知県立小津高等学校】

吉村 大祐

【高知県立岡豊高等学校】

石川 剛志

伊豆 敏郎

内村 寛

岡本 美和

岡村 佳章

川井 文雄

本吉 としえ

【高知学芸高等学校】

来 英昭

坂本 雅代

中越 朱実

藤原 顕伸

米田 進

【高知大学 生活共同組合】

泉 慎二

【高知大学 食堂】

西川 容子

【一般】

岩田 博
大槻 俊彦
岡林 敬介
小笠原 敏雄
掛橋 昭和
片岡 典子
川竹 大輔 (高知県特別職知事秘書)
北村 正忠
小松 隆
小松 昭行
塩田 富樹
坂本 良昭
曾我部 講成
谷脇 頌悟
中嶋 啓介
中山 隆
中山 博史
西山 博秀
橋本 篤廣
濱田 賢治
堀川 秀弘
増田 憲男
明神 保
森田 英一 (株式会社 シェイク 社長)
森田 節夫
森本 増雄
依光 晃一郎 (特定非営利活動法人 FUSE)

※敬称略 50音順

※2004年9月時点

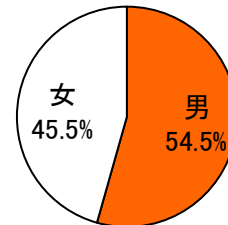
当コンテストにご理解・ご協力頂き誠に有難うございました。この場を借りてお礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

『Hot ShiChu Project 2004』実行委員会 一同

6. 参加者分析

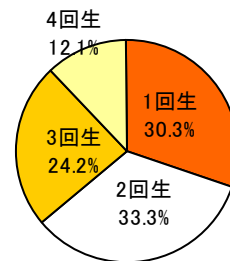
性別

性別	人数	%
男	18	54.5%
女	15	45.5%
合計	33	100.0%



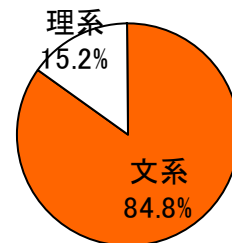
学年

学年	人数	%
1回生	10	30.3%
2回生	11	33.3%
3回生	8	24.2%
4回生	4	12.1%
合計	33	100.0%



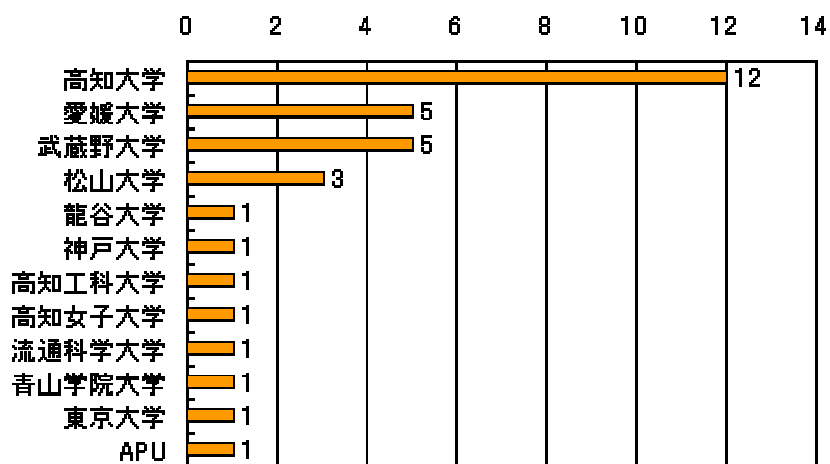
学科

所属	人数	%
文系	28	84.8%
理系	5	15.2%
合計	33	100.0%



所属大学

学年	人数	%
高知大学	12	36.4%
愛媛大学	5	
武蔵野大学	5	15.2%
松山大学	3	9.1%
龍谷大学	1	3.0%
神戸大学	1	3.0%
高知工科大学	1	3.0%
高知女子大学	1	3.0%
流通科学大学	1	3.0%
青山学院大学	1	3.0%
東京大学	1	3.0%
APU	1	3.0%
合計	33	100.0%



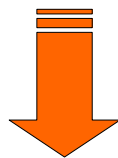
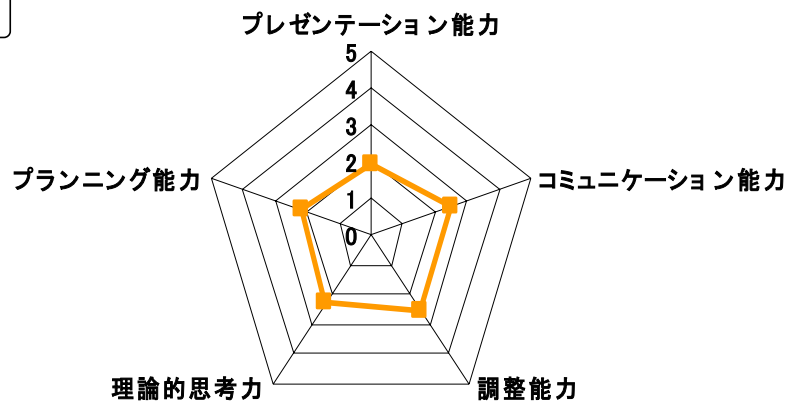
7. アンケート分析結果

Q1

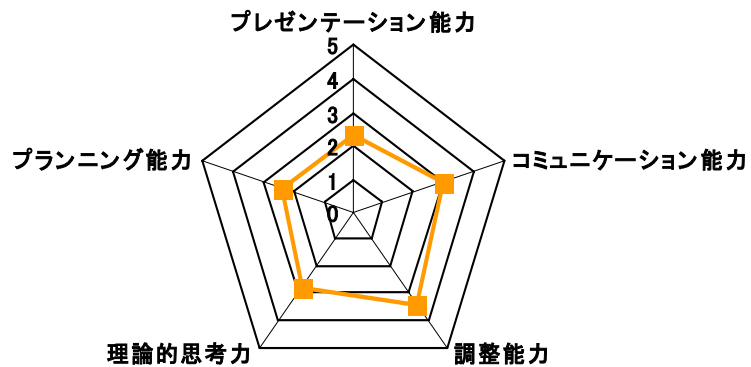
この4日間でのあなたの成長度を参加前・参加後の能力チャートで表現して下さい。

(5段階評価・・・1→全く自信がない、2→自信がない、3→どちらとも言えない、4→自信がある、5→非常に自信がある)

参加前

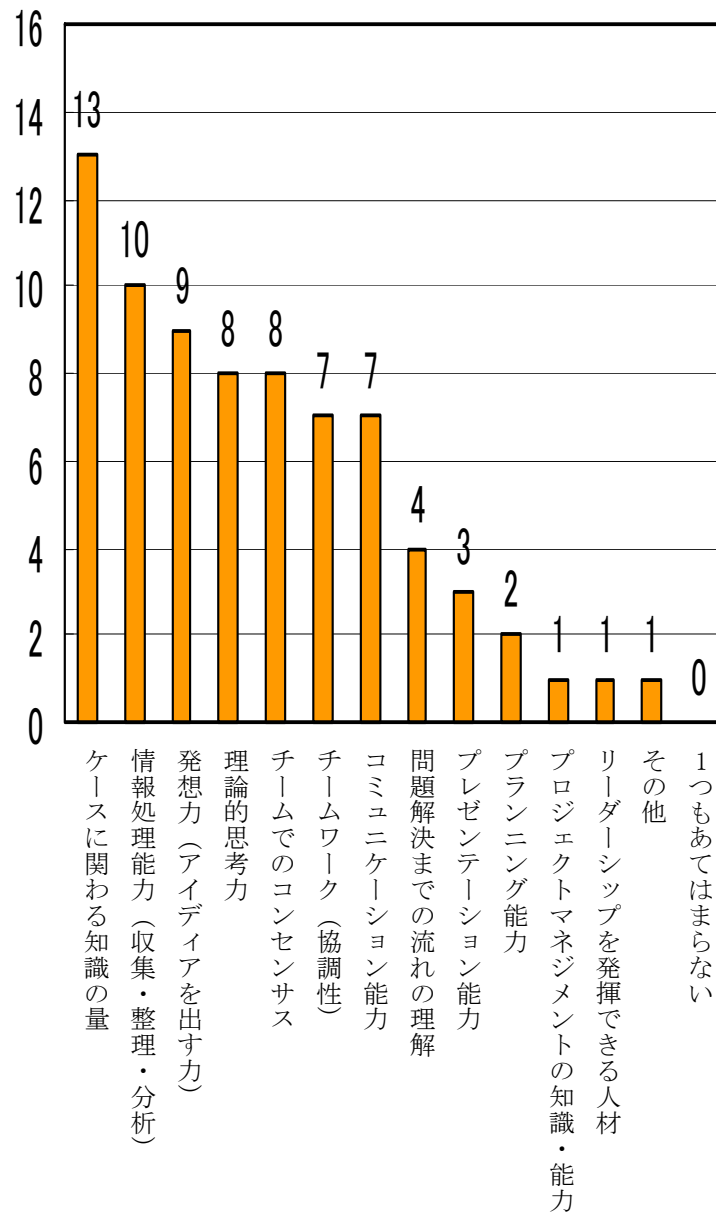


参加後



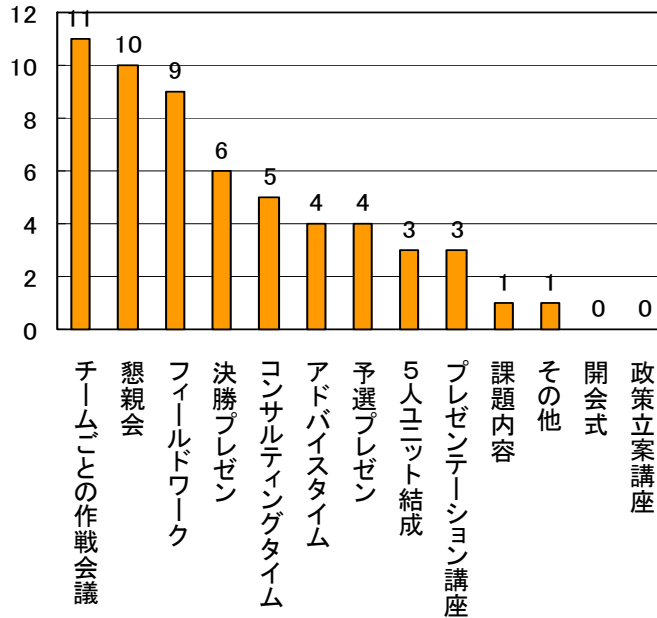
Q2

Hot ShiChu Project 2004 を終えて、より良いプランを作成するために重要だとあなたが感じたこと、考えたことにあてはまるものを3つ選んで○をつけて下さい。



Q3

この4日間で印象に残ったコンテンツまたはプログラムを下記の中から3つ選んで理由とともにお答え下さい。
(特にない場合は空欄のままでもかまいません)

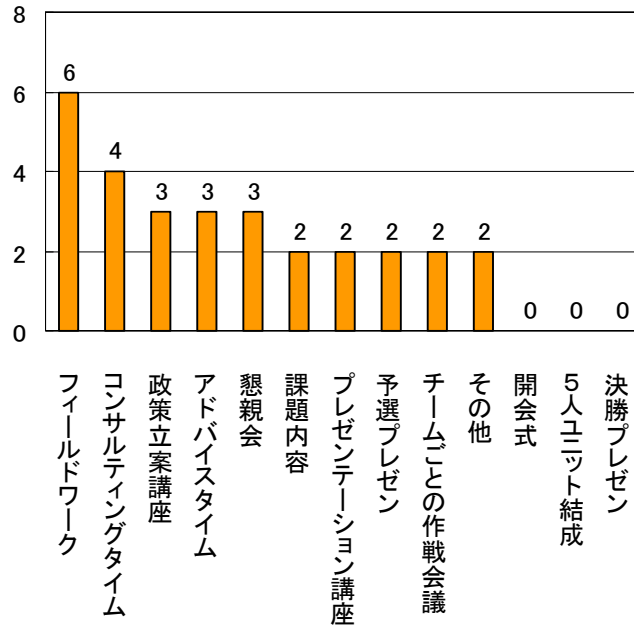


理由

チームごとの作戦会議	チームの個性がぶつかることもあったが、お互い支えあうことができた
懇親会	チーム以外の人と仲良くなれた
フィールドワーク	こういった機会がないと関われない人の話を聞くことができた
決勝プレゼン	予選で見えた問題点を改善しているプレゼンテーションが見えておもしろかった
コンサルティングタイム	自分と普段話せない人に自分のプランに対してコメントしてもらえたため
アドバイスタイト	的確なアドバイスがもらえたため
予選プレゼン	予選プレゼンで敗退したのはくやしい気分になったが、充実感があった
5人ユニット結成	チーム結成は4日間のすべてに影響したから
プレゼンテーション講座	1分間プレゼンなど、自分の知らない新しい発見が多かった
課題内容	自由度が高くて苦勞した
その他	誕生日をみんなに祝ってもらったのがうれしかった

Q4

この4日間のコンテンツまたはプログラムの中で不満に思ったもの、改善が求められると感じたものがありましたか。下記の中から3つ選んで理由とともにお答え下さい。
(特にない場合は空欄のままかまいません)



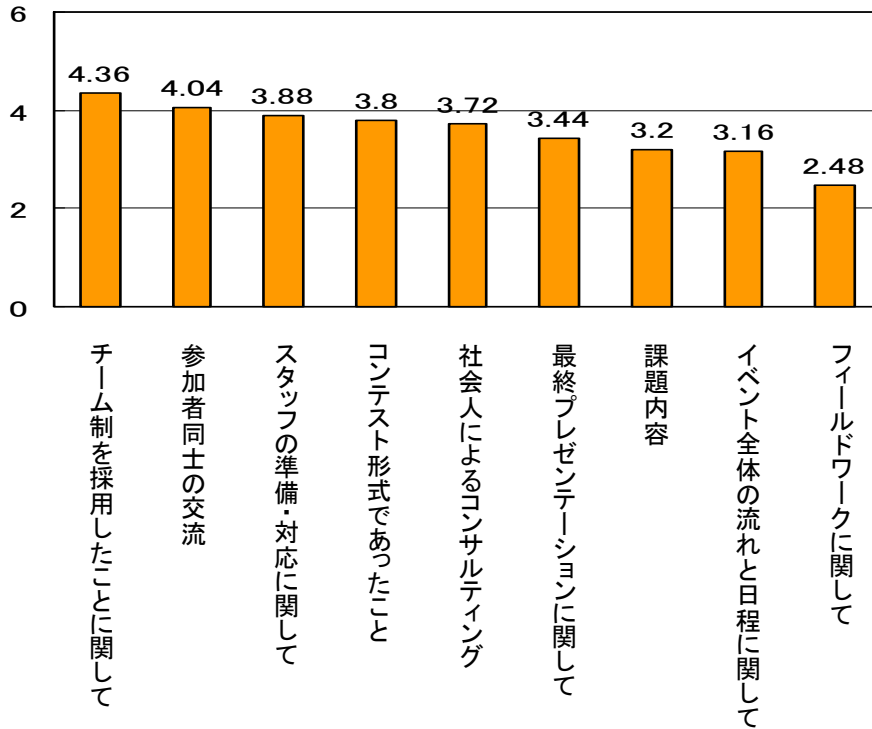
理由

フィールドワーク	バスの時刻表がわかりにくかった ・ もっと時間が欲しかった
コンサルティングタイム	もっと内容をたたいてほしかった ・ 時間が少なかった
政策立案講座	分かりやすいが、応用が効かなかった
アドバイスタイム	良い点を引き出すアドバイスをして欲しかった
懇親会	最終日だったので、体力的にきつかった
課題内容	内容が難しすぎた
プレゼンテーション講座	印象に残るものが少なかった
予選プレゼン	審査員によって評価が違ったので混乱した
チームごとの作戦会議	チームごとに部屋があればよかった
その他	交通手段の少なさに不便を感じた

Q5

以下の項目に対するあなたの満足度を5段階で評価し、一言コメントも添えてお書き下さい。

5段階評価…1→非常に不満足、2→不満がある、3→なんとも言えない、4→満足、5、→非常に満足)



理由

チーム制を採用したことに関して	たくさんの仲間ができてよかった
参加者同士の交流	チーム以外の人と仲良くなれた ・ 男女の比率が悪い
スタッフの準備・対応に関して	親切な対応だった
コンテスト形式であったこと	プランをより高めようと思えた
社会人によるコンサルティング	いい経験になった
最終プレゼンテーションに関して	予選で敗退したチームのプランも見たかった
課題内容	調べることにより、新たな発見ができた
イベント全体の流れと日程に関して	延長が長かった
フィールドワークに関して	もっと時間が欲しかった

Q6

我々スタッフはHot ShiChu Project 2004 の理念として、『主体的に「行動に移す」ことのできる学生の増加』を掲げ活動してきました。今回ご参加下さった皆様の今後のアクションプランを教えてください。

- ・ 今後は英語を使ったコンテストに参加したいと考えている。
- ・ このような企画に進んで参加したい。
- ・ 留学して語学を学び、インターンも経験したい。
- ・ 自分のプレゼン能力のなさを痛感したので、今後は人のプレゼンなどを見て勉強していきたい。
- ・ プランニング能力、マネジメント能力ができるようなインターンを経験したい。

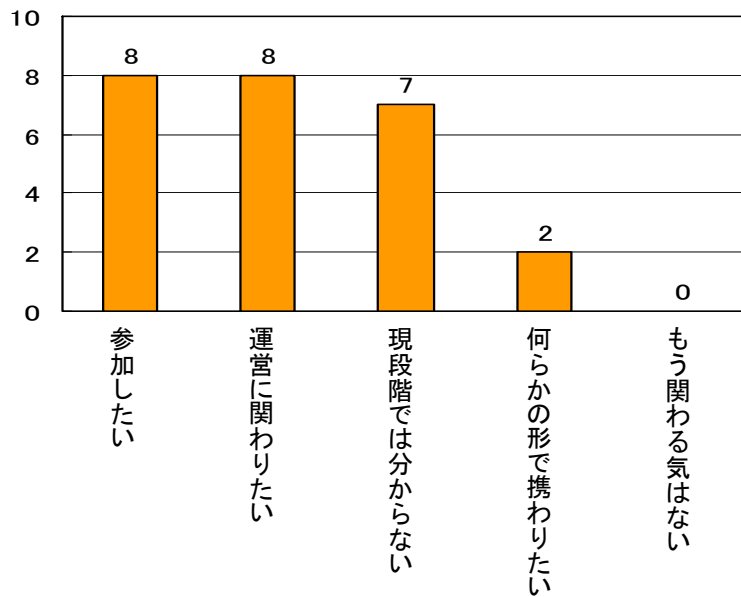
Q7

Hot ShiChu Project 2004 に参加しての率直な感想を聞かせて下さい。ご意見、ご要望等、よろしくお願いします。

- ・ 楽しかったし、勉強になった4日間だった。
- ・ 3泊4日というのは、大変短いと感じた。自分に足りないものは何か明確に見えた気がする。
- ・ この企画に参加したことで、一回り大きくなれた。
- ・ チームメイト同士ですごく親しくなれて刺激を受けた楽しい4日間だった。
- ・ 自分の能力のなさを痛感した。心の底からなんとかしなくては、と思えた。
- ・ 来年も参加してみたいほどおもしろかった。
- ・ 政策立案などの“何をどう作ればいいのか”という説明をもっと詳しくしてほしいかった。

Q8

もし、Hot ShiChu Project 2005 が開催されるとすれば、参加したいまたは運営に携わりたいと思いますか。いずれか1つに○をつけて下さい。



理由

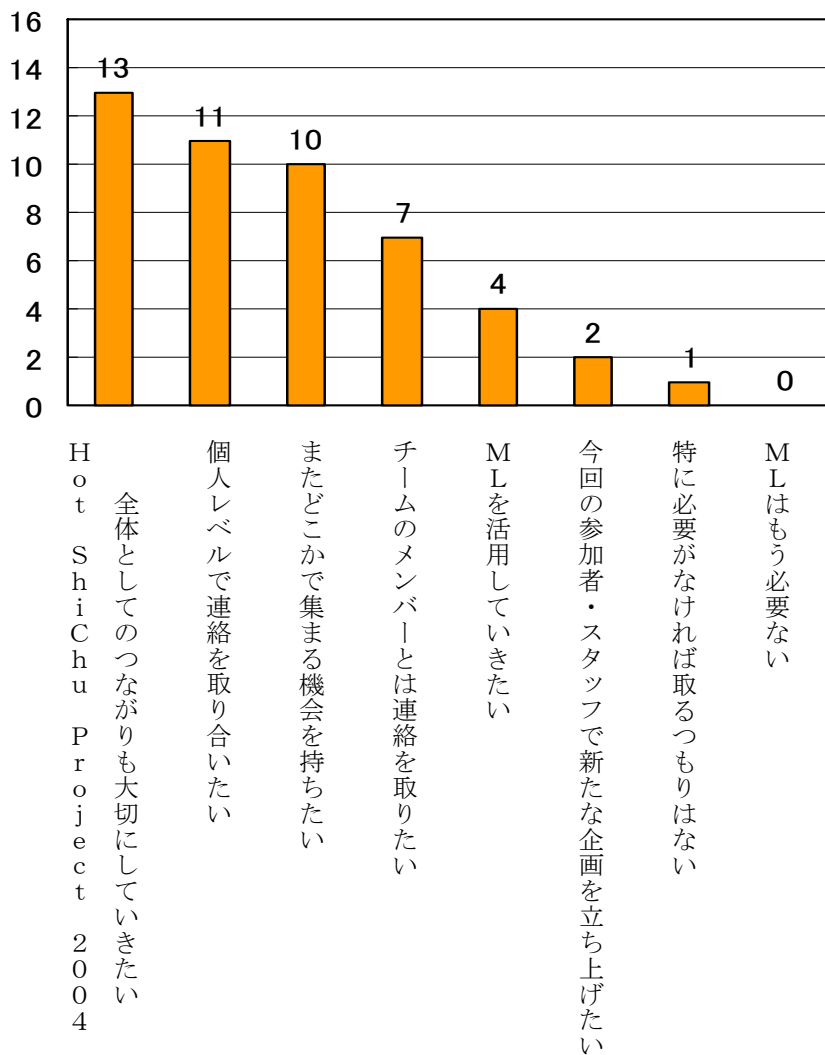
理由を聞かせて下さい。

- ・スタッフの準備がしっかりしていて、こちらも気持ちよかったため。
- ・今回の経験を踏まえた上で、次も参加したい。
- ・2004に参加して、力不足なのが分かったため。
- ・予選プレゼンで敗退し、とてもくやしく次回こそは・・・と思えたから。
- ・普段の生活をしていては、得られないものが大きかったため。
- ・次回は、参加者以上に大変だと思うがスタッフとして関わりたい。

Q9

今後、今回の参加者あるいはスタッフと連絡を取り合い、情報交換をおこなったり、一緒に新たなアクションを起こしていくことを希望されますか。下記の項目のうち、あてはまるものを全てに○をつけて下さい。

希望する	23人
希望しない	1人



Q10

以下の項目の中であなたがあてはまるものに○をつけて下さい。

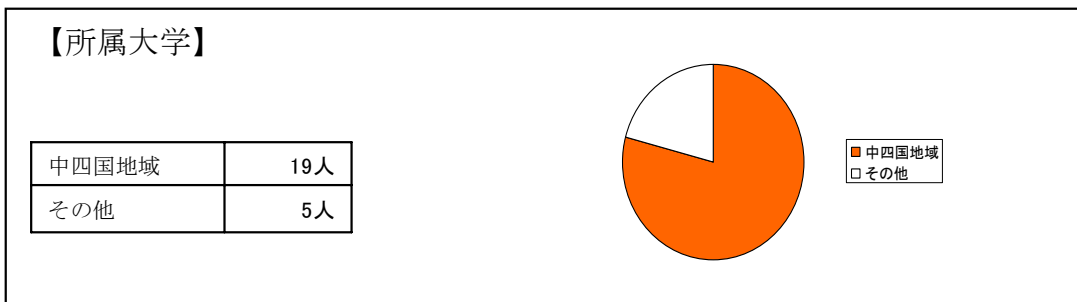
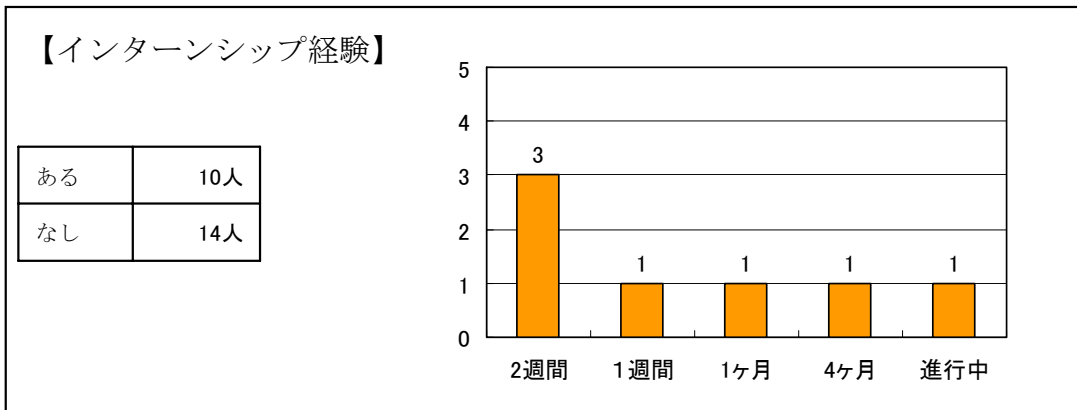
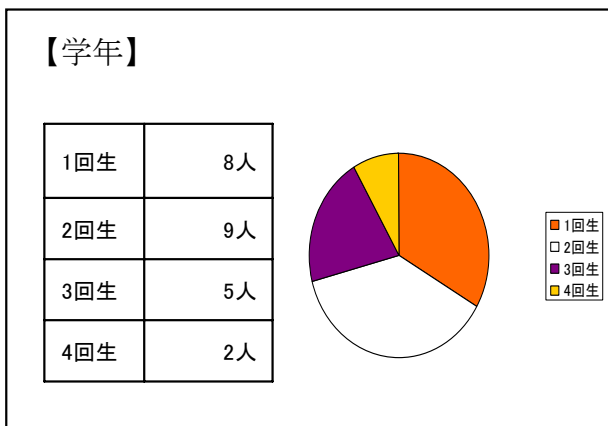
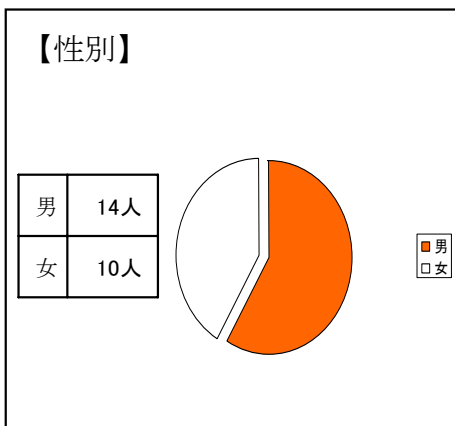
【性別】 男 ・ 女

【学年】 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4

【インターンシップ経験】 ある ・ ない

※あると答えた方→期間を教えてください ()ヶ月間

【所属大学】 中四国地域の大学に所属 ・ その他の地域の大学に所属



8. スタッフ紹介

代表

高知大学 人文学部 社会経済学科 3年 有光 紀子

9月15日～19日、高知県立伊野スポーツセンター・高知大学にて『Hot ShiChu Project 2004』を開催しました。このコンテストは、人文学部社会経済学科2～4年生を中心とした10人のスタッフで企画運営しています。私は、このプロジェクトで、1年間代表を務めさせていただきました。

このコンテストを立ち上げたきっかけは、昨年の夏休みに東京で行われた『学生の政策立案コンテスト GEIL (ガイル 2003)』に参加したことです。これは、全国各地から100人の学生が集まり、7泊8日かけ、与えられた社会問題に対する解決策を5人1チームのチーム対抗で優劣を競い合うコンテストです。何がカルチャーショックだったかと聞かれると言葉では言い表せません。何より様々な価値観を持った学生達と昼夜を徹して議論したことが大きいと思います。学生のモチベーション・能力の高さ、高知では決して出会うことができない彼らとの出会いは私に大きな衝撃を与えました。高知だけに留まるのではなく、数多くの学生が出会い、そして共に考えることができる場所が必要なのではないかと強く思い、そういった場所を作り出すためにこのコンテストを立ち上げることになりました。

コンテストの内容は、中四国の学生を50人集め、3泊4日の合宿形式で与えられた地域問題に対する解決策を4～5人のチーム対抗で優劣を競い合うというものです。最も苦しんだことは先述した『GEIL』との差別化にあります。東京で行われる『GEIL』と自分達の企画においてコンテンツはほぼ一緒ですが、地方らしさや自分達の企画らしさというもの非常に考えさせられました。私たちは、「差別化」として、参加者の個人的能力アップを重視するよりも、数多くの学生との出会いを重視し、チーム以外の学生とできる限り多く触れ合うことのできる企画をコンテストの中に組み入れることにしました。チーム形式であるためにチームの人々としか触れ合うことができないという状況を回避するという目的もあったからです。この方針は参加者からも大変評価され、他大学の学生同士が集まり、触れ合うことの意義を明確にしたと言っても良いでしょう。

『Hot ShiChu Project 2004』は成功したと言えますが、“運営”という観点から見ると、反省点も数多くあります。初期段階でのプロジェクト全体に対する見通しが甘かったこと、部署同士の情報共有が曖昧であったこと、企画の魅力を学生に伝え切れなかったことなどが挙げられます。企画の魅力を学生に伝え切れなかったことは、スタッフ全員が後悔している点であろうと思います。その結果、50人の学生を対象にしていたのですが、33人しか集めることができませんでした。自らの力不足を思い知り、他人に企画の魅力を伝えることの難しさを痛感し、“参加しようと思わせる魅力”と“そう思わせるプレゼンター

ション”の大切さ、そして何より参加してくれる人があっての企画ということを決して忘れてはいけなかったと思います。また、私自身、プロジェクトリーダーというポジションは初めての経験であり、試行錯誤の連続でした。どのように組織を運営すれば効率よく仕事が進むのか、非常に悩まされました。プロジェクトリーダーを経験して強く思ったことは、命令をするだけではなく、スタッフが抱えている仕事の進行状況を把握し、的確な指示を出すことの難しさです。ただ仕事を任せるだけではなく、仕事の進行状況を常に把握し、自分がすべきことは何なのかを常に意識するよう心がけました。

さらに、このプロジェクトを通して、様々な社会人の方々にお話を伺う機会がありました。自分達のプロジェクトに対して客観的な意見を頂いたり、共感して下さったりし、社会人の皆様に頂いた意見を持って帰って、スタッフ間で議論を重ね、より良いプロジェクトへと反映させることができたこともプロジェクト成功につながった大きな力だと感じています。ご協力頂いた社会人の皆様には大変感謝しております。本当に有難うございました。この場を借りてお礼申し上げます。

『Hot ShiChu Project 2004』が終わり、様々な反省点が挙がりましたが、私たちスタッフ 10 人はこの 1 年間で確実に成長したと思います。何より、スタッフみんなで一つのことをやり遂げた達成感は何事にも変えがたい大きな自信になっています。コンテスト本番では数々のハプニングに見舞われましたが、一人一人が自分の役割を見つけ、適切に対処することができました。何もかもが初めての出来事で、資料作成から当日運営まで多種多様な仕事を体験し、企画力から企画運営力まで身につけることができ、大変貴重な経験をしたと思います。今回この企画を実現させたことによって、“他大学間交流”の必要性をより一層確かにし、来年へと是非続けていきたいとスタッフ一同強く思っています。



～夕食時間～

メディアPR部

高知大学 人文学部 社会経済学科 3年 明石 美和子

メディアPR部は、中四国学生政策立案コンテスト『Hot ShiChu Project 2004』の告知ポスター・パンフレットを作成し、新聞・テレビ等のメディアに対し、当イベントを取り上げてもらえるよう活動しました。

5月にイベントを行った際には、参加者25名（うち2名欠席）で1泊2日という規模の小ささ・予算の都合上、自作のポスターとパンフレットでした。しかし、9月の本番では株式会社『南の風社』に依頼し、立派なポスターとパンフレットを作成することができました。今、両者を比較すると、さすが9月の本番の分はプロに依頼し、デザインやレイアウトについて何回も打ち合わせしただけあって文句の付け所がありません。片や、5月のパンフレットは、写真、図もない文字ばかりで、イベントの魅力をうまく表現できていないように感じます。イベントを知る1番の手段であるポスター・パンフレットは、学生に「参加したい」と思わせるような、魅力的で、見る人の視覚に訴えかけてくるようなものでなければなりません。そして、分かりやすくなければなりません。以上が、ポスターとパンフレットを作成してみて学んだことです。

そして、肝心のメディアに対してのPR活動はというと、8月に高知新聞社に取材を依頼し、8月13日付けの朝刊に写真付きで掲載していただきました。予想以上に大きく取り上げてもらい、スタッフ一同、やや興奮気味だったことを覚えています。今回のイベントでは、高知新聞社とNHK高知放送局に取材を依頼しましたが、取材を受けることが初めてでしたので非常に緊張しました。また、このイベントの企画説明、企画に至るまでの過程、運営理念、目標、我々スタッフのイベントに対する思いなどを相手に分かりやすく伝えることがこんなにも難しいものだとは思いませんでした。イベント告知・参加者募集の為、大学のゼミ回りを行った際、ある教授に言われた言葉「このイベント自体はすごいものだと思うけど、君たちの宣伝の仕方だと、学生が参加したいと思うまでにはいかない。魅力がイマイチ伝わってこない」。ズバリ言い当てられた、といった感じでした。また、私たちは「このイベントに参加した学生にこうなってもらいたい」といったビジョンは持っていたのですが、「地域をこうしたい」といった部分が薄く、中四国でやる意義が相手にうまく伝わりませんでした。このことはNHKの方にもご指摘いただいたことです。

以上の反省点・指摘いただいた点を踏まえ、話し合いを行い、私たちの宣伝方法の何がいけなかったのか考え、再度ゼミ回りを行いました。私たちの宣伝に足りなかったのは参加者の目線に立って、このイベントの魅力を伝える、ということです。私たちはいつの間にか上からものを言う、押し付けがましい宣伝をしていたのです。この宣伝方法を改めた結果、参加者を確保することができ、PR方法の仕方しだいでこうも変わるものなのかと驚きました。PR活動は非常に奥が深い、と実感した瞬間です。来年の夏、『Hot ShiChu Project 2005』を開催することが決定した時には、今年の反省点を踏まえ「イベント内容を相手に分かりやすく、かつ魅力的に伝える」、そんなPR活動を心がけたいと思います。

学生対応部

高知大学 人文学部 社会経済学科 4年 種田 陽平

9月15日青空が広がっていました。私達はこの日を迎えるために準備をしてきました。5月末に行われたプレイベントの直前に私は『Hot ShiChu Project 2004』に参加しました。参加からの4ヶ月間は、決して順調とは言えませんでした。9月15日を広がる青空と同じように、やる気に満ちたすがすがしい気持ちで迎えることができたことは間違いありませんでした。

スタッフの中で唯一の4回生である私。4回生である私がなぜこのような活動に参加したかという、自分自身を成長させたいという思いからでした。確かに就職活動や卒業論文と私がやらなければならないことはたくさんありましたが、それらと同じように今しかできず、必ず自分自身にとってプラスとなると思えることだったからです。

プロジェクトの中で私は学生対応という仕事を中心に受け持ちました。参加者を募り、コンテスト当日やコンテストの前後における参加者への対応を中心に仕事を行ったわけです。その中で、私は自分の考えを伝えることの難しさや、他者の視点に立って物事を考えることの重要性を改めて感じました。私はこれまでの経験の中で、自分の考えの伝え方や他者の立場に立って物事を考えるということに関して、少なからず自信を持っており、それが今回の仕事の中で生かすことができると思っていました。しかし、思うように参加者を集めることができなかつたということ、多くのハプニングに見舞われたことなどから、至らない点が多々あったことは言うまでもなく、改めて多くのことを考えさせられました。

私には成長していく過程の中で目標があります。それは、広い視野や多様な価値観を持ち、それらを元にあらゆる状況においても的確な判断を下すことができる人間へと成長することです。今回のことは、自分の目標に近づく上で大きなプラスとなったことは間違いありません。自分の考えの伝え方や他者の立場に立って物事を考えることに関して、これまでとは違った新しい考えをもつことができました。また、コンテスト中に起こったさまざまなハプニングに対しても柔軟に対応することができたことも大きな収穫であると言えます。

コンテストの開催にあたり、常に頭に置いていたことがあります。それは自己満足で終わってはいけないということです。私自身が満足していくイベントとして成功させることや多くのことを得ることはもちろんですが、参加者が満足してくれるものであるか、多くのものを得ることができるかということが重要であり、イベントそのものの成功は主催者側の主観で判断できるものではなく、参加者の満足度によって図られるものであるということです。その為になにができるか、何をすべきかということを考えて行動することができるようになりました。

今回のイベントの成功は、多くの人々の協力や応援なしではありえませんでした。本当に嬉しく思います。ありがとうございました。

学生対応部

高知大学 人文学部 社会経済学科 3年 宇田 智之

5月のイベント終了後、スタッフとして『Hot ShiChu Project 2004』に加わってから4ヶ月間、学生対応部として活動しました。部署としての仕事に関してはその名の通り学生対応です。参加者募集が1番の仕事でした。部署の3人はそれぞれに自分のネットワークを活用し、参加を呼びかけました。残念ながら目標としていた50名の参加者を集めることはできませんでしたが、全国各地から33名の学生が参加してくれたことを嬉しく思っていますし、参加者の皆様には感謝しています。

このプロジェクトに参加する際に掲げていた目標としていたことが2つありました。1つ目はプロジェクトマネジメント能力を実践で試すということ。2つ目は自らのネットワーク拡大を図るということ。

プロジェクトマネジメントという面から見れば、今回のイベントは準備段階でかなり見直すべき点がありました。スケジュール管理ができていなかったり、仕事が遅れることが多々あったりと反省点ばかりが浮かびます。原因は初期段階でのプロジェクト全体に対する見通しが甘かったのだと考えています。

しかし、開催期間の4日間は少人数のスタッフとしてはかなり質の高いパフォーマンスが出せ、参加者からも高い評価を頂きました。スタッフ間での意識の高まり、プロジェクトマネジメント能力の向上をもたらした成果ではないかと思います。プロジェクトマネジメント能力に更に磨きをかけるため、今回の反省を生かす機会を必ず持ちたいと思っています。

2つ目の目標としていたネットワークの拡大は、学生対応部という役割にも恵まれたおかげで十分に達成できました。今後、参加者とどう関わっていくのか、ネットワークをどうやって更に拡大させていくかが課題だと思っています。

今回、『主体的に「行動に移す」ことのできる学生の増加』実現のための場として中四国地域とその地域に住む学生に一石を投じることができたのではないかと考えています。学生同士が出会い、様々なことを感じ、学び、考える、そしてそれぞれが自らのフィールドへ帰って活躍していく、その出会いの場に『Hot ShiChu Project』がなれば・・・というのが私の理想であり願いです。私はまだ『Hot ShiChu Project 2004』は終了していません。4日間はあくまで「きっかけ」にすぎません。「これから」が大切だと思います。

学生対応部

高知大学 人文学部 社会経済学科 2年 岩田 典子

「人との出会いで人は変わる。そんな場を提供したい」。

東京で開催された、学生が運営するビジネスプランコンテストに参加し、そう思ったのがきっかけでした。そしてふつふつと湧いてくるそんな思いに、共感してくれる人が現れました。ここに、このプロジェクトの原点があります。

それから約一年、9月15日、『Hot ShiChu Project 2004』（中四国学生政策立案コンテスト）は無事初日を迎えました。私はこれまでの一年を、あっという間なようでとても長く感じました。根底にある思いは同じでも、このプロジェクトへのイメージが実行委員内でそれぞれ違い、それを一つにまとめるのは至難の業で、それを繰り返すのはとても根気のいることでした。

5月末に開催したこのプロジェクトのプレイベント。完全に詰めきれてないことや、初めての試みということへの言い知れぬ不安。それを吹き飛ばしてくれたのは、他でもない参加者の皆さんでした。1泊2日という強行日程の中でほぼ徹夜で取り組んでくれる姿を見て、単純に「やってよかった」と思いました。そして協力して頂いたアンケートの「しんどかったけど、新しい自分を発見できた」、「社会人の方の厳しい意見で、チーム内の雰囲気もプランも良くなった」、「今までこんなに何かをやりきったことがなかったので、充実感がある」といったような感想を見たとき、去年の9月の新鮮な気持ちを思い出し、自分の目標が少しでも達成されてとてもうれしかったことを覚えています。

そして迎えた本番。9月15日、快晴。参加者の皆さんが徐々に集合してきます。大荷物で県外から来てくださった参加者を見たとき、自分達が目指したものはとても大きいものなのだ、改めて実感しました。始まってみるとあっという間で、睡眠不足もさほど感じないほど忙しく、充実した4日間でした。

このプロジェクトを通して学び、そして4日間でその大切さを強く感じたもの。それは、「チームワークの大切さ」です。これは最低必要なものですが、ときに最高の武器となりえます。特にこのような政策立案などという場では、各々の知識や経験が重要視されがちです。しかし、これらを十二分に生かすためには、何よりチームワークが大切であることを学びました。こう一口で言っても、円滑に進めるのは難しいのが人間関係ですが、そこをどう構築するかという過程に人との新しい出会いがあり、切磋琢磨した仲間だからこそ、それからの人生の宝になるのだと思います。

最後に、参加者の皆様、お忙しい中ご協力くださいました社会人の皆様、実行委員そして教授。素晴らしい経験をさせてくださったことに、心から感謝しております。本当にありがとうございました。

プログラム部

高知大学 人文学部 社会経済学科 3年 檜村 彩加

プログラム部の仕事を一言で言い表すと、「4日間のスケジュール管理」です。初日から最終日までの細かな時間の流れ、移動の手段・方法など、全てにおいてスケジュールを立てる時点では“予想”で行わなければならないので、その時間配分や移動手段の手配に苦労しました。また開催日直前まで参加者の変動があり、参加者人数によって発表の時間などの配分が違ってくるので参加者人数が変動する度に気が気ではありませんでした。

「ハードなスケジュールを過ごす参加者にとって、どのようにすれば快適に過ごしてもらえるのか?」。今回の『Hot ShiChu Project 2004』は、中四国からだけではなく近畿、首都圏という遠方からも多く参加してくれる方がいたので、このことが特に重要になりました。遠い場所でも時間や環境に不便を感じることをないようにスケジュールを立て、ケアをしたつもりでしたがそうはうまくいきませんでした。イベント当日、手配していた大学のバスが遅れたり、公共交通のバスの時刻表をあいまいに表記してしまったために参加者が迷ってしまったり・・・アクシデントは何度か生じてしまいました。3泊4日という短い期間の中で、時間は特に重要になってきます。今回の私の不手際と経験不足から“確認”と“仲間と密に連絡を取る”の重要性を痛感し、次回に活かしたいと考えています。

このような大きなイベントに初めてスタッフとして参加することを経験しましたが、予想以上にハードなものでした。しかしいざイベントが終わるとなるともいえない充実感と爽快感が満ちてきて、参加者以上に楽しんでいた自分に気づきました。参加者の方の中にも「もっと長い間、参加したかった」「スタッフの準備が整っていて、気持ちがよかった」という意見を頂き、やはりスタッフとして参加してよかったと感じています。

この経験は、大学生活の中で一番の思い出として一生残るでしょう。今回の参加者の方々とスタッフでイベントを成功することができて、本当によかった。心からそう思っています。ありがとうございました。



～スタッフルームにて～

課題策定部

高知大学 人文学部 社会経済学科 3年 岡田 真理子

課題策定部は主にイベントの核となる課題を作成する部署です。現代の社会は多くの問題を抱えており、この果てしない問題の中から今回何について取り上げるべきなのか、何に重点を置いて課題を作成すべきなのか、課題決定までは試行錯誤の連続でした。課題決定までには県庁や小学校、社団法人などに実際に足を運び課題作成のヒントなる情報を収集し、3泊4日という期間、学生としての立場からの政策、そして一番に中四国の学生を集め高知県で開催する意義ということに重点を置き課題作成を行っていきました。

イベントの目的である『主体的に「行動に移す」ことのできる学生の増加』、課題策定部としてこの一番の目的を達成するためにできることは何であるかと考えたとき、首都圏の問題ではなく地方が抱える問題を取り上げることにより、参加者に地方に対する危機感や自分達がなんとかしなくてはならないという当事者意識を持ってもらい地方発信のきっかけとなって欲しいと考え、今回の課題決定に繋がりました。

課題作成部として当日の審査員やコンサルティングに参加して頂く社会人の方を確保しなくてはならなかったのですが、今回がイベント開催第1回目ということもあり（プレイベント除く）知名度が低いため、ゼロからの説明をしなくてはならず、イベント内容や目的、課題内容を理解してもらうという伝えることの難しさを痛感しました。伝える際の工夫として簡潔にまとめた課題用プレゼンテーション資料を持っていき、できるだけ分かりやすく説明するなど自分なりの工夫をこらすよう心がけました。

今回のイベントは前例がなく全てが手探り状態であったため個人として、スタッフの一員として戸惑う事も多々ありましたが、その分多くの事を学ぶことができました。渉外に際しての注意点、資料の作成の仕方など本当に多くの事を学んだのですが、私がこのイベントを通して一番強く感じたことはあたりまえのことかもしれませんが、一人では不可能なことも多くの方々の支援や同じ志を持った仲間が集まれば、このような大きな目標を達成することができるということです。今後も何事に関しても志は常に持ち続けたいと思います。そして、このイベントから得たことは私の一生の財産となるでしょう。



～Aチーム・優勝の瞬間～

課題策定部

高知大学 人文学部 社会経済学科 2年 角田 美紗季

はじめに、私はもともと政策立案コンテストや、ビジネスプランコンテストというような大会には興味を持っていない人間でした。高校までは部活に明け暮れる毎日で、同じクラスの子が、弁論大会や、スピーチコンテストに参加していても、「へえ～、すごいね～。私には絶対できんわ」という言葉しか返せず、ただスゴイスゴイというばかりで、どうして参加しようと思ったのか？実際参加してみて、何が一番難しかったのか？などという言葉はポロリとも出てこなかった。しかし、高知大の社会経済学科に入学したことが私のターニングポイントとなった。そこで私は、今までにあったことのないような味のある先生や、変わった先輩、おもしろくてやる気のある仲間に出会えたことで、自分の中の固定されていたイメージというものが徐々に変化していきました。固定されたイメージというのは、例えば、“企画を考える”ということでは、「企画なんて思いつかない。だから自分には無理だ。」と思っていたのだが、実際取り掛かってみると楽しいもので、自分の企画に対して「おもしろい」と言って賛同してもらえたり、「もっとこうしたほうが良い」などの意見をもらえると、どんどんはまっていってしまいました。そこで実際やってみて思ったことが、今までは、ただ、「思いつかない。無理」という言葉をやる前から真っ先に放ってしまい、その言葉が自分の行動に規制をかけていたような気がします。ここで考える楽しさを知った私は、コンテストに参加することや自分でイベントを企画するということにも興味をもつようになり、そして、高知大でもついに、政策立案コンテストを立ち上げると聞いて、スタッフに参加させてもらうことになりました。

私は、課題策定部担当でした。課題というのは、そのコンテスト全体に関わる大事な部署で、課題の内容ひとつで、良くも悪くもなってしまうので、とても慎重に考えました。プレ大会の経験から得た、「参加者自身が、わくわくするような企画で、課題を考える。」ということと、『地域に密着した、地方大会独特の味の出る課題』を念頭に、スタッフで話し合い、方向性を決め、行政や教育、NPO など多くの方のお話やご意見を聞き、そのつど修正や改善を加えていきました。

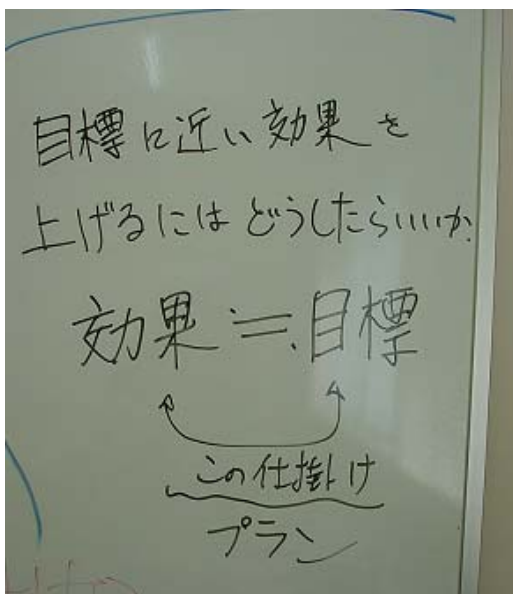
このように、今回の『Hot Shi Chu Project 2004』は多くの方のご協力やあたたかい支援によって成功することができました。

たとえば、高知県知事の秘書の川竹大輔氏や県の教育委員長の大崎博澄氏など、普通の生活を送っていたらお会いすることもできないような方にも協力していただけて、貴重なお話をお伺いすることもできました。それが実現できたのは、もちろんみなさんの人柄の良さですし、また“高知だからできたこと”だと私は思います。そこで、首都圏と高知を比べると、都知事の秘書の方や、教育委員長とお話をするということは、まず難しく、不可能に近いことだと思います。しかし高知は県民と行政機関との距離が近く、また学生の話に真剣に耳を傾けてくれる理解のある方が多いことから、本当に高知は恵まれているなとここで実感することができました。

しかし残念なことに、私は東京での長期インターンシップのため、途中からスタッフの

活動ができなくなってしまい、本番もその場にいることができませんでした。けれども、高知でのプロジェクトの進行状況や本番の様子などを聞いた感触や、帰ってきた時に見た、みなさんの表情から、成功したのだと実感でき、とても嬉しく思いました。

私は、この『Hot Shi Chu Project 2004』にスタッフとして関わらせてもらい、失敗もあったけれど、そこから学べたことは大きく、何より、普段の学生生活を送っていたら味わうことのできない、とても良い貴重な経験をすることができました。これを活かして、残りの学校生活も「主体性を発揮して、行動に移せる人間」に、今はまだ未熟だけれど、卒業するときには達成できているように、徐々に近づいていこうと思っています。ご協力いただいたみなさま、本当にありがとうございました。



～作戦会議中～

1日のほとんどが作戦会議に費やされました



渉外部

高知大学 人文学部 社会経済学科 3年 浦志 知香子

確か私がはじめにこの企画の実行委員として関わったとき、発案者は「高知でだって学生の活気あふれるイベントをやれるんだ！ということを証明したい」と言っていたと思います。私はこの『やる気』に賛同し、手を貸したいと思って実行委員になることに決めました。

5月に行ったイベントまでは、参加者にどんなテーマで議論してもらおうかということ企画するケース部で、それ以降は企業や社会人の方に私たちの企画に協力をお願いして回る渉外部で活動しました。

課題策定部で一番難しかったことは、『この企画を高知でやる意味』ということに常に意識して企画しなければならなかったことです。『Hot ShiChu Project 2004』と似たような構想で、もっと規模の大きなものが首都圏ではたくさん行われています。それと同じことを高知でやったところでいいものにはならない、高知でやるから“こそ”いいものを目指しました。実際イベントでは、高知特有の『街路市』を扱うことになり、“高知っぼさ”が出せたと思います。

渉外部では、個人的には社会人とお会いする機会が持ててとても勉強になりました。社会人の方に口々に言われたことは、「学生だから社会人のみんな協力してくれると思うけど、まだまだ甘いね」ということでした。やはり、高知大学内で活動していること自体は大きなことでも、社会に開けた活動にはできていないことを実感しました。社会人のご協力を得るのに何のメリットの提示もなしに、まるでお金に困った時に親に頼るかのような感覚で社会人の方に協力をお願いして回ってしまっていた『甘え』がありました。それに気づいてから、活動はなかなか難航しましたが、私にとってはそれに気づけたこと自体が一番意味があったと思います。

全体を振り返ってみて、きちんとした『企画』として形になるまでにすごく時間がかかりましたが、『学生の活気あふれるイベント』として参加者に提供できたと思います。私は5月末に行ったイベントにしか参加することができなかったので、その時のことだけしか言うことが出来ませんが、参加者が「また1からやり直しですよ」と愚痴を言いながらも少しうれしそうにこぼすのを聞いて、『考えることの楽しさ』を提供できたと実感してうれしかったです。

反省する点もたくさんありましたが、それを改善して『Hot ShiChu Project 2004』が高知大学での毎年恒例行事となればと思います。

渉外部

高知大学 人文学部 社会経済学科 3年 小松 悠

私が『Hot ShiChu Project 2004』に参加したのは3月で、他の主だったメンバーより少し遅いスタートでした。地方をゲンキに、地方の学生に刺激を、という内容に賛同はしたものの、私自身、関東圏のイベントなどにはまったく参加したことがない、まさに『地方の学生』でした。スタッフのほとんどのメンバーは、東京でのインターンシップやイベント参加経験者で、同級生ながら、自分より一歩も二歩も進んだ視野や人脈を持っていました。そんな中で自分がスタッフとして本当にやっていけるのか、正直とても不安でした。

誘われた当初から、私は渉外部というお仕事をいただいていた。やはり一番苦労したのは、本イベントでの協賛金集めです。5月のプレイベントでは参加者からいただいた参加費で、足りない部分はなんとかスタッフが節約して賄えたのですが、本イベントでは日数も規模も大きくなり、さすがにスタッフの手弁当…というわけにもいきません。しかし、本イベントでのケース課題は『地域に根ざした総合的な学習を提案せよ』。この課題では、企業に賛同していただくような企業側のメリットが、ほとんどとっていいほどなく、本当に悩みました。けれど、課題あつての『Hot ShiChu Project』です。課題策定部を始めとするスタッフ一同が練りだした、イベントの核とも言える課題を、協賛金集めのために変更することはできません。又、自分自身、教育分野には興味があり、4日間議論するのにふさわしい課題だと思っていました。そんな、私達の『気持ち』と『やる気』を非常に高く評価してくださり、ご協力いただいた社会人の方々や母校の先輩方には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。厳しいご意見もたくさん伺いましたが、そのどれもが、確実に自分の財産になったと感じています。

開催中の4日間には、予想外のトラブルもたくさんありました。事後アンケートでは、参加者からスタッフの対応に不満の声も聞かれました。ですが、4日目の交流会に参加者のほとんどが残ってくれたこと、何より毎晩遅くまで真剣に課題に取り組む参加者を目の当たりにして、自分自身このイベントに参加した意義を確認できました。もちろん、スタッフとして、さらに渉外部として反省すべき点は多々ありますが、今回広がった人脈を活かし、今回の反省や失敗を挽回する機会をどんどん作っていく予定です。多くのキッカケを与えてくれた『Hot ShiChu Project』に本当に感謝したいと思います。

『Hot ShiChu Project 2004』 中四国学生政策立案コンテストを終えて

明石 美和子

『Hot ShiChu Project 2004』が終了して、今までのことを振り返ってみると、よく1年間も継続してやってこれたなと思います。それほど中身の濃い、充実した1年でした。有光から昨年の秋に「一緒に企画をやらない？」と誘われた時は、「良いよ」の一言で了承した私でしたが『GEIL2003』にも『KING2003』にも参加していないため、コンテストのすごさや、「他の学生も自分たちのように刺激を受けて変わって欲しい」という思いはあまり理解できていなかったように思います。どちらかと言えば、私はスタッフとして参加するより参加者としてこの企画に参加すべきだったのかもしれませんが、でも、今考えると、1年間スタッフとしてイベントに携わることができて本当に良かったと思います。この『Hot ShiChu Project 2004』に携わることで様々な人と出会い、刺激を受け、自分の意見を持ち、それを表現すること、人に言われてから動くのではなく自分から進んで活動することができるようになりました。スタッフとして活動することで自分を「変える」ことができたのではないかと思います。

突然ですが、今回の『Hot ShiChu Project 2004』というイベントを一言で表現するとすれば、私は「人との出会い・繋がり」と答えます。イベントを通して、素晴らしい仲間と出会い、私たち以外にも、それぞれの大学で「地方のため、学生のため」に一生懸命頑張っている学生がたくさんいることを知りました。また、このイベントを行っていなかったら出会えてなかったであろう社会人の方々とお話をし、企画に対して、私たち自身に対してアドバイスをしていただくことで、企画の欠点や活動方法の問題点が見えてきました。その問題点を解決するため、スタッフ間で議論を深めるうちに、自分の考えを表現することができました。そうすることで、徐々にスタッフ間の繋がりも深まっていったように思います。メンバーを見ても、それぞれ個性が強く、周りから見たらまとまりがないように思うかも知れませんが、これがなかなかのベストメンバーだと思います。それぞれが、任された自分の役割をきちんと果たし、イベントを成功させるため一生懸命頑張りました。8月、9月はほとんど毎日大学に通い準備をしていたのですが、私が途中で挫折せず、ここまで頑張ってきたのも、この個性の強いメンバーのおかげだと思います。イベント期間中は、スタッフ8人で運営し、正直人手が足りず、参加者に迷惑をかけてしまった場面もありましたが、お互いがお互いをフォローし合い、それぞれが臨機応変に対応することで何とか頑張れました。各スタッフの真剣な表情、イベントにかける熱い思いを知り、繋がりも自然と強くなっていきました。『Hot ShiChu Project 2004』を行い「出会えた人」、「スタッフ間での深い繋がり」をこれからも大切にしていきたいと思います。

ここで、個性の強いスタッフメンバーに『Hot ShiChu Project 2004』というイベントを一言で表現するとすれば何？」と聞いてみました。まず、このイベントの代表を務めた有光は「気付きの連続」と答えました。「組織において何が大切か、自分の克服すべき点は何なのかを気付かされた」と言います。代表を務めたからこそ見えてきたモノ、分かったことがあるのでしょう。「代表って柄じゃないから本当はやりたくない」と私に良く愚痴をこぼしていましたが、この1年間途中で投げ出さず、本当に良く頑張ったと思います。プ

プログラム部を担当した檜村は「通過点」と答えました。「イベント前までは、9月15日をゴールとして頑張ってきたが、終わってみると、問題点やこれからの課題も出てきて、イベント終了がゴールではない。通過点なのだ」と思ったそうです。課題策定部の岡田は「新しい世界への挑戦」、同じく角田は「人情のスパイラル」と答えました。『Hot ShiChu Project 2004』の課題テーマが「地域に根ざした総合的な学習を提案せよ」ということで高知市教育委員会や他の教育関係者にヒアリング調査を行った際「こんな人もいるから話を聞いてみたらいいよ」と親切に社会人の方を次々紹介してもらい、人情味の厚さにとても感謝したそうです。渉外部の浦志は、参加者とスタッフを星にたとえ「流星群」と答えました。「年に1度、観測地によって見え方はバラバラ。それに天気の影響を受けやすいから」が理由です。確かに、イベント期間中は、天気に恵まれず、予定していた花火大会はキャンセルになり、移動の面で参加者にかなりの負担をかけました。せめてもの救いは台風が来なかったことでしょうか。そして、学生対応部の岩田は「チームワークの難しさと大切さの再確認」と答えました。「スタッフ間だけでなく、各チームを見て、チームワークが知識や経験よりも大切であることを教えてもらった」そうです。

スタッフそれぞれがこのイベントを通して感じたこと、学んだことはこれからの学生生活でも活かされてくると思います。イベント終了後、参加者の1人から、「進路について行き詰っていたが、多くの方とお会いすることにより、これからの活動の方向性を固めることができた」というメールをもらいました。また、別の参加者からは「高知に小学校を創るという夢を夢で終わらせたくない」という熱いメールをもらい、『Hot ShiChu Project 2004』が、スタッフだけでなく参加者自身の何かを「変える」きっかけになれたことを嬉しく思います。中にはイベントに対して、厳しいコメントをしてくれた参加者もいて、スタッフで反省会を行い、イベントが終了したからといって満足して立ち止まっただけではいけない、益々精進していく必要がある、ということを確認しました。「また来年も参加するから」と言ってくれた参加者の思いに応えるためにも。



9. 最後に

長くなりましたが、中四国学生政策立案コンテスト『Hot ShiChu Project 2004』にご理解・ご協力いただいた社会人の皆様、大学関係者、そして参加者のみなさん、本当にありがとうございました。この場を借りて、深くお礼申し上げます。何かを企画し、それを実行に移すことがこんなにも大変なことだとは思ってもみませんでした。皆様からいただいた様々な意見・アドバイスは私たちスタッフにとって非常に有意義なもので、スタッフ1人1人を確実に成長させました。来年も運営に携わることができるのなら、今回学んだことを活かし、より多くの人と出会い、刺激を受け、自分自身を「変えて」いきたいと思えます。そして、参加者自身を「変えて」、中四国をこれまで以上に「Hot」にしていきたいと考えております。

Hot ShiChu Project 2004 実行委員会 スタッフ

有光	紀子
明石	美和子
岩田	典子
宇田	智之
浦志	知香子
岡田	真理子
檜村	彩加
小松	悠
種田	陽平
角田	美紗季

Hot ShiChu Project 2004 ・ 中四国学生立案コンテスト

2004年度 高知大学 人文学部 社会経済学科

Hot ShiChu Project 2004 ・ 中四国学生政策立案コンテスト実施報告書

2004年度4大学間学生交流自主的・実践的研究プロジェクト採択

後援：経済産業省四国経済産業局 高知新聞社

発行：高知大学 人文学部 社会経済学科 Hot ShiChu Project 2004 実行委員会

発行日：平成16年 月 日

連絡先：高知大学 人文学部 社会経済学科 鈴木啓之研究室

TEL :

FAX :

印刷：

《参考資料》

Hot ShiChu Project 2004 課題

地域に根ざした総合的な学習を提案せよ。

《立案におけるポイント》

*以下の点を踏まえた上でプラン策定を行って下さい。

①「地域に根ざした総合的な学習を提案せよ」という課題について、子ども達が地域問題に対する関心を高めることができる総合的な学習の提案という視点から、チームごとに地域社会の実態、児童・生徒の実態を考慮した形でより具体化した独自の理想を設定して下さい。

②プランは下記の留意点に1つでも触れていること。いずれかに関わっていれば良い。

(留意点)

- ・ 教育内容に地域的特質を盛り込むこと。
- ・ 地域住民の要求を含むこと。
- ・ 地域における子どもの生活や経験を含むこと。
- ・ 子どもに生活の知恵を学び取らせ、地域課題解決の力を身につけさせること。

《評価要素》 各項目 10 点満点で採点する。※ただし表現力のみ 20 点満点とする。

- (1) 着眼点 (鋭い視点で捉えた現状をもとにプランが策定できているか)
- (2) 具体性 (プランがどこまで具体的に策定されているか)
- (3) 新規性 (斬新なアイデアが盛り込まれ、特徴的で独創性の高いプランであるか)
- (4) 論理性 (プラン策定のプロセスが筋道立てて進められているか)
- (5) 実現可能性 (実際に授業として実現できる可能性があるプランであるか)
- (6) 効果 (このプランを実行した際、予想される子ども達と地域への影響が考慮されているか)
- (7) 魅力《子どもの視点》
(子どもにとってこの授業が魅力的であり、意欲的に取り組めるものであるか)
- (8) 魅力《審査員の視点》
(あなたから見てこの授業が魅力的であり、積極的に授業を受けたいと思うか)
- (9) 表現力
(プレゼンテーションの技法、わかりやすさ、内容のまとまり、発表者の熱意はどうだったか)
(プレゼンテーションを聞いての“感動”があったか)